

鶴警窟香會五事之記

聖
十五
母
門

多9
1398
18



門多9
踊 1338
巻 18

鶴巻香會九事之記



城西にありて寺あり真正寺といふ院に月将上人を
有るふかひを好み給ひて既に點天木の及ハ千家の流を
汲て清茶を盡し散香の及ハたり免幃各集り
名つらきとおつ今ハ中臣の百太郎の道すき給言
古へのひらきち乃乃きまらむをめしし吾ふくふ令
六々五名の煙に心魂をま命 流りていりま

いぬる日真琴主の標のいすいのつゝいよおくれの昔嬢よ
様まをあたけおれもさみほひておますもいさうし
難益多きをさるやとあふよかふみて五百のあたる
とまひよいぬ日や日流心とちて二日と三日よ
るいぬの朝ましまよるはますよさる人のあつ
とまひよさる主とちて千田忠一と安後栄を主
おいつまへまらぬふやと人こ共よそのむらうよ
つゝあつてふれいぬまよいやくぬき、あ方の草物を

くけそのとよ料紙硯をかき極よ香益と
ま多て香具唐物をまへまへみかいはいさる
いさかて焼合の式とあつて巡とまよいさる
のいち乃いさるやとあつておのくおれもいさ時
ちのあつていんりの障子とあつてけい唐屏のいさこの
あつてまらぬおれもいさるぬ難のまら秋の
まらぬもまらぬ時えいさるぬ彩りて
あつていさるぬあつてあつて遠山いさるぬ也

よよこさぬる庭中よ床座をささげ纏を
おれいふおのこいれは腰をささげ眺をいふ
ささよけ香席よ茶の湯の釜をささけ香をいふ
真琴主いいて此香の茶の湯の釜をいふ
突もおれいふ眺をささげ纏をささけ
人の糸をいふささけ纏をささけ眺をいふ
あれいふ眺をいふ人の東羅の色香をいふ
南山の眺をいふいさよ眺をいふささけ纏をいふ

えんー眺をいふささけ纏をいふ
あつらふ入れの地焙の火のたきよ松風のたき
もやうくいふささけ纏をいふ
眺をいふ軸をあつらふいささけ眺をいふ
ささけのり炭をいふ香をいふささけ眺をいふ
夜よ入る短檠をいふいと野小硯を短冊を
ささけ眺をいふささけ眺をいふささけ眺をいふ
の三字をいふ物各うて歌をいふあつらふおのこささけ

うぢかきまぬや時移るるも茶を主つとて
炭のうをなつて燵の炭をつき添へて一は為金
野て出給まきし一床をふつてたすぬぬおぬ
一間は合して五さし乃志きし万香を弛ぬ香具
おのとのつる香櫃よりぬきぬしにて何れ
とつぬきを合し煮せよとのきしささぬぬ
おとしぬきを合し煮せよとのきしささぬぬ
おまてあぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

かぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
侍りし五種の香路をかこむつと支し句ぬぬ
のけらぬおまて折向の歌とふさぬぬぬぬぬ
の夜もぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
下酒に漸もさひぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
の事ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

鑑乃

よめおのりといふ處をつけて、神の心よといさしう席中
いそぎのしる、真容主のまのよ、乃茶丸のよれ道い
とて、庭より、曉方の茶一、不色かきまのま
まきる、あやを、ひらり、お給ふよる、人
か、こよいづ、かの、櫛、いそぎ、つま、足、あ、う、上、人
中、庭、ま、よ、茶、して、茶、茶、の、つ、ま、の、も、て、を、い、は、む
この茶も、ま、た、う、ゆ、ん、も、ほ、い、う、と、て、中、庭、ま、の
茶、と、三、つ、四、つ、の、ワ、ラ、ち、一、包、を、試、し、の、こ、ろ、一、包

と本香のしる、かきま、ま、きの、ま、く、の、ま、を、か、ま、て
は、い、の、り、と、歌、の、ま、め、と、ま、と、ま、お、ま、て、よ、む、こ、ろ
と、あ、う、ぬ、は、お、り、ま、上、人、い、う、い、え、給、ち、ん、ま、ま、く
して、降、子、の、何、を、い、よ、ま、い、く、と、ま、あ、い、う、か、て、腰、よ
ふ、い、さ、と、帯、て、い、さ、と、り、さ、る、何、半、丸、と、真、容、主、を
先、こ、う、入、り、い、え、る、ま、後、羽、恋、と、い、つ、る、歌、の、一、軸、と、拭
席、中、ま、ま、ま、ま、ま、い、上、人、と、出、さ、る、茶、合、あ、う、て
煙、の、ち、ま、の、い、ま、の、庭、つ、え、う、と、と、大、ろ、う、ら、く

とちりて底取りしして釜の水もあつたふり
ゆいて茶の湯もあつたふりいもまき香あり
中互の東に向つる廣縁あり乱れおちいさき碗
をたま繪やうの紙のちり筑波香の記し書しき
くけく限の灰押よりおまおまきをう真琴三連歌
け孝向とゆつ終り忠一之終をつけ終りおのれ
お三をつけ上人は奉をうれおちく蜀山を
つけ終りて表八向のなりをうぬ午時さる

頃茶をきくをうぬれと何れと物供をき
してわくく夕日山の端のゆきをうけしけく
く群きのすきをちりまきはくぬのまき
お一日はわくして多成あつてもゆきいし
上人のみぬい心のまきしてきききき
おのれゆき椀と杖ゆきんこ公の命はき非
れぬくゆきまおち赤りのおそく守りて
そらけを値してききしゆつてききき

四 忠一 此のいさゝかゝる今はいさゝかゝる
天保十一のころ 神在月二日の夜
多ういさゝか

源成正

神無月二日 炷合 寶鏡 主 月將

一 掛物 山井三位氏興 郷懐紙

身よりいさゝか 夢といさゝか しのぶ
多ういさゝか ちさか 千鳥 水く ねえ

一 朱軸 服

料紙 中奉書 硯 在繪 水引 紅白

一 棚

上 香盆 朱地長蓋 蘭画 金在繪

香爐 都分秋

香筋立 魯山燒茶巾筒之用

火 香筋

香盒 二唐物

炷空入 青樂隱元豆 路方化

香合 香爐 右有之

下

火取香炉 梨子地金符爐

六種炷合記

初霜 月將

枯蘆 成正

九木橋 中焦

真琴以春秋有之 南李の路二種之也
捨多之也 亦三の多也 南李多之也

車煖合銘附合の定法多岐種々の柳
こぼれゆく

浦人

忠一

渙火

栄幸

轉森

真冬

重聞一柱和歌記

枯蘆

柴人のあまれを削て在木を
うらたきぬ谷うらたき 岨 真琴

延虫少紅やうきさぬさう火乃
あさるまきくま 世をうらたき 栄遠

世もかくらるる氣くはる 在木を
と流るるもくはるまがくはる 忠一

名をうけやま、谷のまはる 木橋

誰住まぬて 世をうけまはる 中意

雅波江や、まはるのまはる 枯りて
咲ちる 浪乃 花をまはる 成心

山人のまはる 谷乃 在木を
けさるるまはる まはる 月將

神を月二日

猪口
向

懐石

松茸燻て
カラスの卵

菓子碗

中酒

吸物

汁
丸太き
大根一叩
ゆづりし

造り敷
山いし
人形
推しけ
春まき

灰う水善すの

同夕組香の茶湯式

主 大花

一 掛物 平春海翁依奇短冊

落をふ 二のし のまゝん 寺すゝ山すゝの
古のゆゑよまのりみちをそえり春海

一 棚

上 菜四方盆

香櫃 至小 古南京深付スへり口

香取立 白銅角

火箸香名よ小の白昇灰押を是て限る

夾ハ不用

香合 梨子地蒔繪将棊駒の紋

炷空入 隠元豆極小 路方化

皆具一覽也有之

下

小火取 黒塗金存繪

小盆、小硯 蓋よ墨香自書小神仙の之字アリ

月將よ真琴州結より炭斗ほろろを拵

出下火を止りて炭団を是の例より釜よ水

是をいあき釜よ湯のお不れをいや

すのふく柳むいより年々四の盆の中かろ

香煙を取おろし袋をぬをたてより火箸を

よりて灰をうきけりよてくろおきかく

すあしよ炭団よおろし小火取を音よ

まきや炷よむいやろよあうたる炭団を

火取し、うすたぬらう、たけ、爐中、灰と、まじり、炭と
おま、紙、ひけ、これ、手、あ、身、た、た、か、り、か、さ、り、
い、め、ろ、ろ、の、お、ふ、た、り、馴、と、ま、い、け、ま、始、り、
よ、ろ、ろ、の、ろ、ろ、ろ、ろ、こ、も、と、人、と、も、ふ、ろ、ろ、
感、し、ゆ、え、り、

記録紙短冊二葉

志まする香の記

おたち

お 扇葉

ち 多納り

古寺

落葉

おくち、おま、ち、おま、乃、ま、み、ち、り、ろ、ろ、ろ、
つ、ろ、ろ、冬、の、や、き、え、ん、ろ、ろ、 栄遠

梅花

おく山乃、い、ち、の、ま、い、こ、の、お、ち、を、ろ、ろ、
ふ、わ、り、い、あ、く、ま、ち、ま、ち、お、ち、 忠一

荷葉

法の師、の、お、ま、い、お、り、井、の、お、み、ち、お、ち、
た、り、い、も、寒、ま、い、お、ち、お、ち、 成正

菊花

おくち、おみ、ち、り、の、後、い、おく山、
世、を、あ、ま、ま、を、ま、い、ろ、ろ、 月将

侍従

のりたをつらふるに^ハおなれと
しつゝいさよちよまむむに佛中慮

黒方

神女月河しのをた^ハち出さる日
まのまみちの^ハおま形て 真琴

神女月二日

出秀

真琴

茶末

はらふるに^ハおま形て 真琴

夜食

酒

者三種

索麵

首三
 六
 食
 六
 食

同夜 磯城島香 主 成正

一掛物 鴨祐局土きり万香懐紙

土きり万香の記

まつたのやう
 神沼山

土きり 万香 の記 まつた のやう 神沼山	鴨祐局 土きり 万香 懐紙	磯城島 香 主 成正
--------------------------------------	------------------------	---------------------

三日曉

煎茶

主中意

庭上並座

涼爐

清六化

急火燒

同

茶碗

新汲深井

菓子

薄碗

かき係獲て湯を片付

少糖好湯多し

記録紙色紙

栗茶系合記

き 白塵ね

久 残香

くき

くちぬるをきこもふらん冬多そくちを

ぬりぬ柔のきせ便 標養

くね升乃よと七月乃後より入るる

柔のちれそえしと 路方

くちやにそ家族より終るけり

くむる柔のけりつき 化風

くねゆきし秋のうみ乃きくろ木をある付

のりぬる友をぬりき 環濟

十月二日

煎茶一事不可入香會五事之數故補之

以炷合繼之繼以聯句再為香會亦一時之

佳趣也記録如左

炷合記

炷出之外
不用正銘

實況實情

とらわすてそとまのふれ秋のそ 月將

目前光景

庭とつりもくもくはらるる 路方

東籬幽賞

もろもろに残くれ菊うまもく 化風

三往舊盟

こうこうらねねの友そくく 榎庵

神無月三日

同朝不時組香の奈の湯 五月將

ウ大記 鷗次郎 源化

待合 庭上考柔と榻と其ま

一檝物 花山院右大臣愛徳公懐紙

後朝寢

よきよきよ今ききくもききく
まのぬきぬき人のあしつり

一宗南棚

六青貝長盆

香爐

都多

匙筋瓶

路方化青樂耳附

香盒

扇衣 山水高存爐

炷室入

新渡深付丸

不

火取

里漆

一金

同大面取

一炭斗

竹皮

一羊田

底取

長火名

一清香三種

懷石

内赤南加打友
精進引ワリ

山卷盤

向

袖

飯

汁 里
春

正可獨枝打丁

久

菓子候

久ア二截

如留寺豆腐

中酒

吸物

玉敷
氷下り

香物

香子塩つけ

中立

鶴巻言屈の條

江原紙 繪羊紙

後波香の記

うろこ火

田中

二二七

ホトトギス 山王守の神も 爲るのん 博養

新古今
時もあれ冬を
まよふに神を月
まよふらうらら
あめの柏木

は月の國の神も 出せたり 爲るのん
いかにすまよぬまに さまの神も 爲るのん
木さしのころまよまきかいて 木のまきを 吹きし
吹くまよまきかいて 木のまきを 吹きし
冊子の景果を 吹きまきかいて

ハトトギス 山王守の神も 爲るのん 博養

こたつちんちん
ひやちんちん
えんちんちん
秋の月

井の原の神も 出せたり 爲るのん
山陰のまよれを 北地とまきかいて 吹きし
地の原のまよれを 吹きまきかいて

陽陽 山王守の神も 爲るのん 博養

中酒

吸物

玉敷

氷下り

香物

存子塩つけ

中立

鶴及言屋の縁

江津紙 繪羊紙

籠波香の記

ろくし
ろくし
ろくし

田中

一一七三

ホーしや美守の神も為る人 博養

新古今
時もあはれ冬を
まよちれ沖を月
けしらるるるる
あめの柏木

は月の國この神もろくし出せたり
いこいこすふよねまねまよちの神もろくし
本さしのろくまよまよふて本のまよを吹きし
吹くろくまよまよろくまよのまよを吹きし
冊言の果れまよろくまよ

ろくまよろくまよろくまよろくまよ 化風

ろくまよろくまよろくまよろくまよ

陽陽まよろくまよのまよ繪と好まれて 路方

初雪しつる情を起して香茶をのまうけ
あつたはるるの香をまよふはなほこむをいさ
まうあつたはるる情を起して香茶をのまうけ
香をまよふはなほこむをいさ
まうあつたはるる情を起して香茶をのまうけ
香をまよふはなほこむをいさ

いづら乃田井よむねむね 環存

斗き之のさゆを形容してゆきゆきの田井
は能のむねむねけさむいんまやうあつたはるる
まうあつたはるる情を起して香茶をのまうけ
香をまよふはなほこむをいさ

十月三日

後入

一水指 銅鮮身付

一茶碗 萩焼 弓高臺

一茶入 所産 真仙茶守花押

袋 金入紙子

一茶抄 糸牙

一茶巾 備前

一茶匙 赤柴

一茶筥 茶し竹

一清茶 松の香

酒多宗有佳

正上

一茶人 茶の味 夏の茶の味

一茶人 茶の味 夏の茶の味

茶人

茶の味 夏の茶の味

